横灘文人庄屋列傳

幕末の庄屋たち

入江秀利

慶応三年二月、幕府は、動乱期にあたり、日田郡代の支配地をより強力に警衛するために、速見郡三六ケ村と大分郡十一ケ村の島原藩御預所を、私領並に支配するという条件で慌ただしく肥後藩に預け替えにした。

肥後藩御預所になって八ヵ月たった同年十月、肥後藩士野田平右衛門が、藩命で豊後御預所の村々を巡在して民情を探索した。その報告書の写が「豊後国御預所一件帳」にある。その中に、

「…右庄屋之内ニハ杵築・日出或ハ日田表エ幼年之時分より写文初諸稽古罷出候ニ付相応弁別仕文筆ナト達者にいたし…御請取即下ハ不遜申出いたし…」

のくだりがある。

新しい御預所の経営には、まず、村役人の心をつかみこれを撫養しなければならない。しかし、当初は島原藩の緩やかな統治に慣れた村役人の、理路整然とした抵抗になかなか手を焼いたようすを窺うことができる。

文中に云う杵築とは三浦梅園・黄鶴であり、日出は帆足萬里の西崦精舎、日田は広瀬淡窓・青村の咸宜園のことである。そもそも横灘の庄屋筋は、

「村々庄屋之儀ハ数百年来連綿仕候家筋多く豪家の者勝ニこれあり候處…」

とあるように、この地方の庄屋は富農であったためかおしなべて学を修め、代々教養人が輩出した。

小浦村の庄屋脇谷儀助（諦則）は、野田村明礬山を再興して豊後明礬の増産と精製につとめ、幕府に働きかけて、享保十四年（一七二九）ついに明礬を幕府の専売品とし、わが国の明礬市場を独占する緒を開いた先覚である。（史談五・六号拙稿参照）

この脇谷儀助の一女スガに肥前国椎田井上清蔵親房の子息則郷を養子にしてもうけた孫が長之（儀一郎）であ

る。この長之が後に三浦梅園に師事し、帆足萬里の師であり、肥後藩鶴崎詰の儒者となった脇蘭室である。

萬里門下の十傑の一人にあげられる後藤薫平は、野田村庄屋後藤八左衛門の一子である。

母方の脇谷一族に脇蘭室がいたからであろうか、父の没後母は蘭室の弟子である日出の帆足萬里に学ばせた。薫平は号を柏園と称した。屋敷内に柏樹の古木があったからである。

薫平は才能豊かで、勝田季鳳の漢詩と後藤薫平の文章は萬里門下の双璧と讃えられた。柏園は大酒豪家で、斗酒も辞せずといった調子でたびたび町家の酒楼に登って酔態を演じたが、萬里は柏園は例外であるといって咎めなかったという。

柏園が萬里から将来を嘱望されていたので、母は姉のイエに婿養子をむかえて庄屋職を継がせ、天性の学才を生かして学問で身を立てさせようとした。蔵書数千巻、和漢の書籍に精通した薫平の名声はとみに上がり、御預所の島原藩主松平主殿頭は登用を考えたが、彼は母の高齢を理由に固辞し、野田村の私塾で近郷の子弟の教育に専念した。

薫平は子供に恵まれず母方の小浦村庄屋脇屋儀左衛門の次男早太を養子に迎えた。早太も長じて養父同様萬里門下に学び、晩年の萬里と行をともにした。その後、名を恕一と改め野田村の組頭となり本家の庄屋を救けて活躍した。

享和三年（一七四三）小坂村の庄屋をついだ高倉曽右衛門（精郷）は、青年期に脇蘭室に学んだ逸才である。

「一別府村の儀庄屋これなく　小坂村庄屋曽右衛門兼帯相勤め候處　他所人多く入込候場所につき庄屋これなくしてハ宜しからず庄屋相立て候様村方へ申聞候處差支の筋これある趣にて今以て其儀申出無く　彼是押移候ては相済まずにつき曽右衛門儀庄屋仰せ付けらる　尤も老年に及び他村に引移り殊に他所人出入も多き村柄引受候て大義の事に付き　御預所中役料として銀三枚ツツ下し置かれ小坂村庄屋ハ倅治八え仰せ付けらる」

「高松御預所聞書」

享和二年、別府村庄屋堀氏の後に小坂村曽右衛門が、高松役所に推されて別府村庄屋となり、同三年倅曽右衛門（精郷）が小坂村庄屋をついだ。「高松聞書」にあるように別府村は、他所者が多く入込み並の庄屋では治めきれない状態であったので、老骨ながらも曽右衛門の手腕が期待されたのである。

文政三年（一八二〇）別府村庄屋の策右衛門（曽右衛門）が没すると、文政七年、曽右衛門（精郷）が小坂村庄屋を倅の定之丞に譲り別府村庄屋となった。明治になって高倉氏の庄屋職が定着するまでは、小坂村庄屋の高倉氏が代々別府村に転住し曽右衛門を襲名して別府村庄屋を継ぐならわしであった。

高倉曽右衛門（精郷）は、小坂の屋敷内に桂樹の大木があり庄屋宅を桂園といっていたので、晩年は桂翁と称した。

日田県大属（さかん）となり、明治三年（一八七〇）のいわゆる竹槍一揆の鎮撫に向かい、大山村で暴徒の竹槍に刺されて二命を落とした高橋敬一は、もと亀川村庄屋であった。

敬一は通称を萬之進、名を廣太郎といった。嘉永三年十五才の時に萬里門下に入門してで学んだ英才で、勤王の志がつよく文久元年（一八六一）亀川村庄屋をついだ後も志士と交わり幕政を批判し改革を唱えた。慶応二年日田郡代に追われた長三洲（ちょうさんしゅう）をかくまい長州に逃がしたという廉で、大分郡光吉村の庄屋米太郎と共に逮捕され日田役所の獄舎につながれた。幽閉の身であった萬之進は慶応四年（一八七一）、御許山（おもとやま）騒動で日田郡代窪田治部（くぼたじぶ）右衛門が日田を逃げだすなどの混乱ののち、再び亀川村庄屋・平田村・北鉄輪村庄屋兼帯を許され、維新後は日田県別府支所の官吏に登用された。敬一の識見は大参事白浜勘兵衛や少参事山形典次郎の認めるところとなり、日田県役所大属に抜擢されたエリートであった。

大正十四年、県政に勤めた功によりに従五位に叙せられた。

〔長三洲　日田郡合田村生、淡窓門下、維新に奔走のち文部大丞・東宮侍講書　書家　天保四～明治二四〕

南鉄輪村の庄屋佐藤畝蔵（松斎）は、青年時代に咸宜園に学び、庄屋職を継いで二十三年間にわたり治政に励んだ。隠居後は皆口屋敷に私塾を開いて大義・孝養を説き後進の指導にあたった。

文久三年（一八六三）に長三洲は日田の木小岳に倒幕の軍を起こし、幕吏の追捕を逃れて、濱脇に潜み、中石垣の矢田梅洞にかくまわれ、鉄輪の菅家の二階天井裏に隠棲した。松斎は咸宜園同門の三洲を庇護し、亀川の高橋敬一と謀らって長州へ逃がしたことは前述のとおりである。後日談であるが、東宮侍講書になった三洲は松斎に対する報恩のため自ら墓銘を書いた。

安政四年（一八五七）庄屋職を継いだ邨彦は、帆足萬里に師事した同門の肥後領鶴崎の儒者毛利空桑と親交が厚くたびたび鶴崎の成美館を訪れている。彼は師萬里を深く尊敬し、元旦には神々や先祖の御霊と共に帆足先生の霊位にも年飾りを供えお祭りしたと日暦に見える。

佐藤邨彦（巌彦・輝夫・蜀水）はとくに地方行政に識見があり、肥後藩御預所になるや「建国書」を認め郡奉行に差し出し、また、維新後日田県になると大参事白浜勘兵衛に「建白書」を提出して、自己の政治的信条を披瀝している。

維新動乱期に、邨彦の叔父北中村（久留島領）庄屋直江哲太郎（帆門杵築藩元田竹渓の門下）は森藩の藩命を受けて杵築藩士友成遜と密かに日出藩の動向を探索したが、叔父を通して友成とも昵懇であった邨彦は両人のために、萬里門下の同窓の士より情報を得て提供していたのではあるまいか。

朝見村の庄屋掘宇一郎は、文政四年（一八二一）日田の博多屋久兵衛（淡窓の弟）の紹介で、別府村の津田文三郎（秋皐）と共に淡窓の咸宜園に入門し業を終えて帰郷すると、父の庄屋職を継いで村政に精根を傾けた。

明治元年（一八六八）横灘一の豪商、筏屋の荒金市郎兵衛が濱脇村庄屋になった。父は荒金義八郎である。

筏屋は、大地主で南町に豪邸をかまえた造酒屋で、七島莚など大坂の大商人とあきないした豪家といわれ、その財力は府内藩や臼杵藩に大名貸をするほどであった。

府内藩の藩主大給近訓（閑山）からはとくに厚遇された。閑山みずから茨屋を訪れたこともある。

義八郎は、俳諧にすぐれ呉石の俳号をもつ俳人で、豊後南画の田能村竹田・帆足杏雨、碩学後藤碩田・毛利空桑・津田秋皐、浜脇の俳人糸永燕石などと親交があった。茨屋はさしずめ文化人が集るサロンであったといえる。田能村竹田の「暗香疎影図」（国指定文化財）は、天保二年（一八三一）に茨屋に逗留中呉石に描き贈ったものである。

このような背景のもとに育った市郎兵衛は、南組筋内の庄屋をよくまとめ維新の混乱期をのりきった。酒造のため朝見より引いた良質の水を門前の水槽に貯えて近隣の者たちに無料で汲ませたという。

最後に、庄屋の一族で村政に貢献し、或いは時流に身を投じた中石垣の医師矢田連一族についてふれなければならない。

長男、淳は文政十二年（一八二九）十六歳で咸宜園に入門した。ここで学業を終えたのち長崎の鳴滝塾に遊学して、シーボルトのもとで蘭方医学を修めた。さらに、向学心にもえる淳は、弟孝次に郷里の医業をまかせて大阪の緒方洪庵の適塾で更に西洋医学に磨きをかけ、再び帰郷して医業に励んだ。

安政五年（一八五八）に猛威をふるった虎狼痢（コレラ）も、蘭方医矢田淳が処方したセンデンハムが効を奏し、村民より一人の死者もださなかったという。高松役所よりもコレラ治療の伝授を乞われた。

淳は、詩書・俳諧にも長じ柳村と号した。

次男の孝次は兄淳の紹介で天保二年（一八三一）十三才で咸宜園に入門した。在学中はとくに詩文にすぐれ、咸宜園百家詩の一人にあげられている。郷里に帰ってのち兄の医家をつぎ医療に尽力した。

三男、希一（梅洞）は、天保十四年（一八四三）兄孝次の紹介で西法寺公慶とともに咸宜園に入門した。十七歳であった。のち、中石垣に私塾「対岳楼」を開き、一時同門の長梅外を招聘して近隣の子弟を教育した。長梅外は長三州の父親で、長州とともに尊皇攘夷論者であった。梅洞が縛吏に追われた三州をかくまったことは先に

述べた。ちなみに、幕末から明治にかけて別府地方の先覚者はほとんど「対岳楼」の門をたたいたことを付け加えておく。

矢田淳の長男矢田宏は、咸宜園で広瀬青村、対岳楼で叔父梅洞、鶴崎の毛利空桑に学んだ。とくに空桑の尊皇攘夷論に感銘し、長三州と行動をともにし長州に逃れて報国隊に加わった。慶応四年（一八六八）報国隊の別働隊に参加して、天草陣屋を襲い、御許山騒動に参画して奔走した。

御許山騒動が鎮圧されると、明治三年（一八七〇）今度は大楽源太郎（だいらくげんたろう）の回天軍に馳せ参じ山口県庁襲撃に参加したが失敗して郷里に帰った。しばらく叔父の対岳楼で助教を勤めたが、明治十年（一八七七）西南戦争が起こると中津の増田宋太郎とともに西郷軍に加わり各地に転戦したが、ついに負傷して捕虜になり国事犯として市ケ谷監獄につながれ二年間服役した。

恩赦放免後は新潟県立師範学校で教鞭をとり、徳島で官吏となるが、やがて曾我子爵に招かれて日本鉄道会社に籍をおいた。晩年は咸宜園の同窓であった大審院長横田国臣の知遇をうけ大正二年七十才で没した。

横灘地方の文人庄屋は、北部は萬里門係、南部に咸宜園係と大まかに分けることが出来る。

ともあれ、庄屋やその子弟が学問に専念できたのは、私領とちがい行政の面での締めつけが緩やかであったからではないだろうか。維新前後の当地の有様は、

「別府・濱脇両村は旅船日夜に出入りの湊にて商家多くこれある場所も数ケ所にこれあり悪者入り込み或は盗賊の巣など唱え候場所柄に御座候」

「豊後国御預所一件帳」

などと書かれているが、これは別府・濱脇村のみのことではなく横灘全村の傾向といってもよい。

お上の目から見ると、まつらわぬ者はすべてが悪人である。報告書ではいかにも治安が悪くて不穏に見えるが、庶民の記録を見る限りでは、かえって自由で活気がありのびのびとしたものが感じられる。天領であったことから、つねに庄屋や庶民の上に郡奉行の厳しい目が光る私領とは違い、庶民の気持ちや台所にはややゆとりが

あったように思える。

だから長三洲や井上聞多（馨）などが飛び込んで来たのであろう。

年貢の率も私領より低く、七島莚・櫨・茶・生姜・硫黄など、幕府の専売であった明礬をのぞいた商品作物は私領のように藩の専売品として囲み込まれることなく、雑税（小物成）ですませて自由に販売することができた。湯治場はもとより、網漁や湯治船の出入りする湊の賑わいなど豊かな経済力のもとに、庄屋をはじめ庶民に至るまで学問にもふれるゆとりがあったのであろう。

御預所の行政は、遠方より派遣されたほんの数人の代官・勘定役人と地元雇いの手代のみに任されており、庶民にかかわることは筋代庄屋達が交替で詰める寄会所の評議で大部分が処理された。

横灘の庄屋は、近隣諸藩の武家と縁続きであり、苗字や一代帯刀を許されたものも多いが、身分はもとより百姓である。民事行政の面で主要な役割を担い、手腕を発揮できた庄屋衆でも、士分と対等なものは学問のみであり、それで彼らを凌駕できることを御預所の庄屋達は如実に感じることができたと思われる。

行政の一端に携わることができた庄屋は、学問により人格の高揚をはかり、大義名分にかなった村政を行なうことが庄屋の面目でり自負であったのではなかろうか。

肥後藩に御預所替えになった当初は、新しい政治体制に馴れず或は庄屋の面目や自負にかかわる変革があったのかもしれない。「不遜申出」でかなり抵抗した幕末の聡明な庄屋衆は、機をみるに敏であったのであろう。探索報告書のこの項の末尾に、

「…当時は御国の御政体自然と承知いたし候哉次第居合候様子相見申候」

とある。

野田平右衛門は、とりあえず安堵の胸を撫で下ろしているのである。

参考文献

大分県史　近代編　「明治維新と二豊」

別府市誌　「近代化のみち」

別府に於ける史的人物の面影　堀　藤吉郎